

ポッジョ・ブラッチョリーニと『伊曾保物語』

——シユタインヘーヴェル編『イソップ寓話集』のスペイン語版について

伊 藤 博 明*

ポッジョ・ブラッチョリーニ(Poggio Bracciolini, 1380-1459)は、イタリアの初期ルネサンスに活躍した人文主義者である。彼はトスカナ地方の小都市テッラヌオーヴァに生まれ、アレツツォで法学と人文諸学を修めたのち、フィレンツェで公証人として働く一方で、当都市の書記官長を務めていたコルツチョ・サルターティ(Coluccio Salutati, 1331-1406)のサークルにおいて研鑽を積み、サルターティの後継者であるレオナルド・ブルーニ(Leonardo Bruni, 1369/70-1444)とともに、フィレンツェ人文主義を代表する人物となった。一四〇三年にはサルターティの推挽によって教皇庁の秘書官の職を得た。彼は教皇ヨハネス二三世に伴ってコンスタンツの公会議に出席し、その機会にクリュニーとザンクト・ガレンなどを訪ねて、修道院図書館において、キケロの未知の演説やクインティリアヌスの『弁論家の教育』など古代の貴重な多くの文献を発見した。

ポッジョは英国に一時期滞在していたが、再度、教皇庁に一四三三年から一四五二年までの長きにわたって勤め、いくつものラテン語著作を執筆した。その大半は対話篇であり、『貪欲論』(*De avaritia*, 1428/29)、『君主の不幸について』(*De infelicitate principum*)、『運命の変わり易さについて』(*De varietate fortunae*, c. 1488)、『反偽

善者論』(*Contra hypocrites*, 1449)は、いずれも世俗的な傾向の強い作品で、教会の腐敗や宗教的な熱狂を始めとして、当時の社会への批判が込められている。晩年はフィレンツェに書記官長として戻り、歴史的叙述として名高い『フィレンツェ史』(*Storia di Firenze*)を執筆した⁽¹⁾。

またポッジョは一四三八年から一四五二年にかけて、『笑話集』(*Facetiae*)と題する、全二七二話から成る風俗譚・艶笑譚の集成をラテン語で著している。この作品は、中世からルネサンスにかけてイタリアで生み出された文学上の一ジャンル「ノヴェッラ」(*novella*)に属し、それは一三世紀末に、おそらくはフィレンツェで成立した、作者未詳の『ノヴェッリーノ』(*Novellino*)に端を発する。その内容と形態については詳らかにされていないが、当初は一二〇から一三〇の小話から成り、一四世紀の半ばに未詳の編纂者によって一〇〇話を選ばれた。その典拠はさまざまで、聖書やギリシア・ローマの古典、中世の騎士道物語、アラビアやヘブライの奇譚、民間説話などが含まれている。このジャンルを洗練された一〇〇の物語に仕上げたのがジョヴァンニ・ボッカッチョ(Giovanni Boccaccio, 1313-1375)の『デカメロン』(*Decameron*, 1353)であり、それに続いたのがフランコ・サッケッティ(Franco Sacchetti, c. 1330-c. 1400)の『三百のノヴェッラ』(*Trecentonovelle*, 1395)である⁽²⁾。

* じょう・ひろあき、教養学部教授 思想史・芸術論

ポッジョの『笑話集』は著者の死後、おそらく一四七〇年にヴェネツィアとローマにおいて別々に刊行された³⁾。その後、本書はイタリアのみならず、フランス、ドイツ、ネーデルラント地方で陸続と刊行され、ポッジョの作品の中でも最も普及したものとなったのである。インキュナブラ(一五世紀刊行の揺籃期本)に限っても、ブリティッシュ・ライブラリー作成の『インキュナブラ・ショート・タイトル・カタログ』所載のデータによると、三〇版も刊行されており⁴⁾、またイタリア語訳も一四八三年のヴェネツィア版など三版が現れている⁵⁾。また、興味深いことには、ロレンツォ・ヴァッラのラテン語訳「イソップ寓話集」、およびフランチェスコ・ペトラルカの『著名人の機知と笑話について』(*De salibus virorum illustrium ac facetiis*)と合本で、一四七〇年代にユトレヒト(?)とパリで、作品の一部が刊行されている⁶⁾。

ところで、ヨーロッパの俗語文学の邦訳として最初の作品は、よく知られているように、一五九三年(文禄二年)に天草の学林(コレジオ)で印刷された、口語訳ローマ字本の『イソポのハブラス』(*ESOPONO FABULAS*)である。この書物は『平家物語』と『金句集』と合本されて刊行され、ブリティッシュ・ミュージアムに所蔵されている唯一の版本の存在は、アーネスト・メイソン・サトウ(Ernest Mason Satow)が一八八八年(明治二年)に著した『日本イエズス会刊行書誌——1591-1610』(*The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610*)によって知られるところとなった⁷⁾。その後、新村出が一九〇八年(明治四一年)から一九〇九年(明治四二年)にかけて同ミュージアムにおいて筆写し、帰国後に氏は、それを漢字仮名交じり文に翻字して、一九一〇年(明治四三年)に京都大学文学部の雑誌『藝文』に掲載し、翌

年には開成館から『文禄旧訳伊曽保物語』として刊行した⁸⁾。他方、『イソポのハブラス』からほぼ二〇年後の一六一〇年代、慶長末年から元和初年の間に、古活字版による国字本『伊曽保物語』が出版され、刊行年の記載がある一六三九年(寛永一六年)まで、現在九種の刊本が知られている⁹⁾。『イソポのハブラス』と『伊曽保物語』の内容は完全に一致していないばかりか異なる箇所も多く、両者の関係については、いまだに完全に解明されてはいない。現在は、両者にとつての祖本となるべき翻訳書(および原典)が想定されている一方で、『イソポのハブラス』の後半部には別の原典からの影響が指摘されている¹⁰⁾。ポッジョ・ブラッチョリーニの『笑話集』に話を戻すならば、実は、この『伊曽保物語』に『笑話集』から数話が採録されているのである(天草版の『イソポのハブラス』には含まれていない)。この事実を初めて指摘したのは、一九一一年(明治四三年)十一月二十七日に京都で開催された史学研究会第三回総会において、「伊曽保物語考」と題する講演を行った上田敏である¹¹⁾。彼は講演の冒頭において、かねてからの「伊曽保物語」への関心を披露したうえで、「……新村出博士は、かの文禄本を親しく手寫されたものを基として、之を國字に書改め、雑誌『藝文』に譯載し、極めて有益な文獻史料を提供された爲、忘れるとも無く打棄て、置いた伊曽保の事がまたまた念頭に浮び、そのまゝこれを以て今日講演の材とする」¹²⁾と始めている。ポッジョに言及した当該箇所は以下のとおりである。

今一つ、獨逸本の笑話に材料を供給したのは、Poggio Bracciolini (一三八一—一四五九)の *Facetiae* である。古典寫本の蒐集家として知られた學者で、法王廳の尚書でもあった此ポッジョオの笑話

は、一四七〇年頃の刊行で種々の雑書、又見聞から拾ひ集めたのであるから、敢て喩言とは言はれないが、一度、シュタイヘエエル本の一部となつてより以来、普通の伊曾保物語に混入して了つた。例へば日本寛永十六年刊行の伊曾保物語三卷中下巻二九、出家と家の事、第三〇、人の心の定まらぬ事は、共にポッジョオの書に在る。前者はまた Le Sage (Gil Blas V. 1) Cent nouvelles nouvelles (96) にもあり、後者は、親と子が驢馬を牽いたり、これに乗ったり、終に擔いだりする話で La Fontaine (III, 1) にも Conde Lucanor という西班牙の笑話集にも又シュンティパスの一異本たる土耳其本「四十國老物語」中、夫人の述べる第一九話にも類話を見る⁽¹³⁾。

上田敏がここで言及している「独逸本」、すなわち「シュタイヘエエル本」とは、ドイツ人ハインリヒ・シュタインヘーヴェル (Heinrich Steinhövel, 1412-1479) が編纂し、一四七六年、もしくは一四七七年頃にウルムで刊行された『イソップ』(Esopus) である⁽¹⁴⁾。シュタインヘーヴェルはシュトゥットガルト近郊のヴァイルで生まれ、イタリアのパドヴァに遊学した医者で、人文主義的な教養に溢れ、ペトラルカとボツカッチョの独訳も残している⁽¹⁵⁾。シュタインヘーヴェル編のラテン語・ドイツ語版「イソップ寓話集」は、きわめて個性的な内容をもっているばかりか、その同時代に与えた影響力において甚大なものがあつた。

簡単にその構成を説明すると、第一部は「イソップの生涯」(Vita Esopi) で、伝マクシムス・プラヌデスのイソップ伝の、レミキウス、すなわちレヌティウス(イタリア名ラヌツイオ) によるラテン語訳である。第二部は「ロムルス集」と称される、中世に流布していたラテ

ン語版イソップ寓話集であり、シュタインヘーヴェルは四卷、各二〇話の合計八〇話を収録している。第三部は「選外寓話集」(Fabulae extravagantes) と名づけられた一七話を収めているが、それらの出自については、ヨーロッパとは異なる地方の寓話群と推測されている。第四部はレミキウス集であり、同様に一七話から成る。これは、シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」に数年先だつて、一四七四年にミラノで刊行された、レミキウス編のラテン語寓話集⁽¹⁶⁾ のことであり、元来は一〇〇話が収録されていた。第五部はアウイアヌス集と呼ばれる寓話集であり、そこから二七話が採り上げられた。第六部が含まれている二二話は、本来はイソップ寓話とはまったく無関係な書物に由来している。すなわち、一二世紀初頭のスペイン人ペトルス・アルフォンズスの『賢者の教え』(Displine clericalis) から一五話が、そしてポッジョ・ブラッチョリーニの『笑話集』から七話が採られている。最後に、シュタインヘーヴェルは補遺として、ロムルス集から一話を付け加えている⁽¹⁷⁾。

この版はその後、ラテン語版とドイツ語版が分けられて刊行され、広く流布することになった。上述の『インキユナブラ・ショート・タイトル・カタログ』によれば、一五〇〇年までにラテン語版はアウグスブルク、シュトラスブルク、アントウエルペン、バーゼルで四版が⁽¹⁸⁾、ドイツ語版はアウグスブルク、シュトラスブルク、バーゼルなどで一四版が⁽¹⁹⁾刊行されている。ラテン語版は一五四五年までに少なくとも二四版が刊行された。さらに重要なことには、シュタインヘーヴェル編「イソップ物語」から、ジュリアン・マシヨール(Julian Macho) によるフランス語版が一四八〇年にリヨンで出版され⁽²⁰⁾、これも一五〇〇年までに七版を重ねたほか⁽²¹⁾、このフランス語版から、ウィリア

ム・キヤクストンによる英語版が一四八四年にウエストミンスターで刊行され⁽²²⁾、一五〇〇年までに三版を重ねたことである⁽²³⁾。また、フランス語版からは一四八五年にアントウェルペンで、オランダ語版が刊行されている⁽²⁴⁾。他方、ラテン語版を基にして、スペイン語版が一四八二年にサラゴサで刊行され、一五〇〇年までにスペイン語版は三版が現れている⁽²⁵⁾。

上田敏が示唆しているように、シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」を介して、ポッジョ・ブラッチョリーニの『笑話集』の一部が、日本に紹介されたと考えられる。イタリア近世の世俗的文学の翻訳・翻案としては、ボツカッチョの『デカメロン』について、きわめて部分的ながら、早くも明治一〇年代からおこなわれた。一八八二年（明治一五年）に刊行された、大久保勘三郎訳『欧州情譜・群芳綺話』に、フランス語訳からの重訳で七話が採録されたほか、いくつかの翻訳が明治初期に現われている⁽²⁶⁾、『笑話集』の日本への伝来は、ボツカッチョに先立つことほぼ二九〇年前のことであった。さて、『伊曾保物語』に採られた『笑話集』の三話は以下のとおりである⁽²⁷⁾。

「中六」さぶらひ鵜鷹うたかにすく事

去程に、えしつとの國のさぶらひ共、鵜鷹逍遙を好む事はなはだし。國王是を諫め給へ共、勅令をおおそれずにこれに長ず。御門いそほに仰けるは、「臣下殿上をまかり出でん時、此費へを語り候へかし」とありければ、かしこまつて承る。折節せつ官人伺候のみぎり、申いだし給ふやうは、「我國に損人をなす醫師いしあり。その養生といふは、器に泥を入れて、その病人をつけ浸す事日久し。ある病者やうやく十に九つなをりける時、外に出でんとすれども、これを制

して、門外に出ず、その内を慰みありきける折節、あるさぶらひ馬上に鷹を据へ、十人に犬牽かせて通りけるを、かの住人走り出、馬の鞍みづつきに取り付き、支へて申けるやうは、「此乗り給ふ物はなに物ぞ」侍答云、「是は馬といひて、人の歩みを助くるものなり」「手に据ゑさせ給ふはなに物ぞ」と問ふ。「これは鷹といひて、鳥を取る物なり」「跡を牽かせ給ふはなにものぞ」「これは犬とて、この鷹の鳥を取る時、下狩する物なり」といふ。住人安じて云、「其費つふへいくばくぞや」侍答云、「毎年百貫あてなり」といふ。「その徳いかほどあるぞ」と問。侍答云、「五貫三貫の間」といふ。住人笑つていはく、「御邊この所を早く過ぎさせ給へ。この内の醫者は狂人を治す人なり。もしこの醫者の聞かるゝならば、御邊を取つて泥の中へをし入らるべし。そのゆへは、百貫の損をして五三貫の徳ある事を好む人は、たゞ狂人にことならず」といふ。さぶらひげにもと思ひけん、それよりして鵜鷹の逍遙をやめ侍りける」とぞ申ける。此物語を聞きける人々、げにもと思はれけん、鵜鷹のの藝をやめるけるとぞ。

この物語は、シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」第一六一番「狩獵への熱意は狂気の沙汰」(Aucupii et venationis stadium summa est amentia) に対応し、『笑話集』第二番「正気を失い、分別を失った者たちを治療していた医師」(De medico qui dementes et insanos curabat) に基^つへ。

Plures colloquebantur de supervacua cura, ne dicam stultitia, eorum qui canes aut accipitres ad aucupium alunt. Tum Paulus

Florentinus: 'Recte hos,' inquit, 'risit stultus Mediolanensis.' Cum narrari fabulam posceremus: 'Fuit,' inquit, 'olim civis Mediolani dementium et insanorum Medicus, qui ad se delatos intra certum tempus sanandos suscipiebat. Erat autem curatio huiusmodi: habebat domi aream, et in ea lacunam aquae foetidae atque obscae, in quam nudos ad palum ligabat eos qui insani adducebantur: aliquos usque ad genua, quosdam inguine tenus, nonnullos profundius pro insaniae modo, ac eos tandiu aqua atque inedia macerabat, quoad viderentur sani. Allatus est inter ceteros quidam, quem usque ad femur in aquam posuit, qui post quindecim dies coepit resipiscere, ac curatorem rogare ut ex aqua reduceretur. Ille hominem exemit a cruciatu, ea tamen condicione, ne aream egrederetur. Cui cum diebus aliquot parvisset, ut universam domum perambularet, item ut exteriorem januam non egrederetur permisit; reliquis sociis, qui plures erant, in aqua relictis. Paruit diligenter Medici mandatis.

'Stans vero aliquando super ostium, neque enim egredi audebat timore lacunae, advenientem Equestrem juvenem cum accipitre et duobus canibus, ex his qui sagaces dicuntur, ad se vocavit, rei motus novitate, neque enim, quae ante in insania viderat, tenebat memoria. Cum accessisset juvenis: 'Heus tu,' inquit ille, 'ausculta, oro, me paucis, ac, si libet, responde: hoc quo veheris, quid est, et quamobrem illud tenes?' 'Equus est,' inquit, 'et aucupii gratia.' Tum deinceps: 'Vero hoc quod manu gestas, quid vocatur et in qua re illo uteris?' 'Accipiter,' respondit, 'et aucupio aptus

querquedularum et perdicum.' Tum alter: 'Hi qui te comitantur, qui sunt, age, et quid prosunt tibi?' 'Canes,' ait, 'et aucupio accommodati ad investigandas aves.' 'Hae autem aves, quarum capiendarum causa tot res parvas, cujus pretii sunt, si in unum conferas totius anni capturam?' Parum quid nescio cum respondi sset, et quod sex aureos non excederet, subdit homo: 'Quaenam est equi, canumque et accipitris impensa?' 'Quinquaginta aureorum,' affirmavit. Tum admiratus stultitiam Equestris juvenis: 'Ho ho,' inquit, 'abi hinc ocuis, oro, atque adeo avola, antequam Medicus domum redeat. Nam si hic te compererit, veluti insanissimum omnium qui vivant, in lacunam suam coniciet curandum cum ceteris mente captis, atque ultra omnes usque ad mentum in aquam summam collocabit.' Ostendit aucupii porro studium summam esse amentiam, nisi aliquando et ab opulentiis, et exercitii gratia fiat. (8)

(私たちは集って、ある人々が狩猟のために犬と鷹を養っていることについて、その愚かさとは呼ばないまでも、その無益さについて論じていました。その折りに、フィレンツェ人のパオロが立ち上がって、「ミラノのある狂人が、彼らのことを笑ったのもっともなところですよ」と言いたのです。私たちは、その物語を話してくれるように彼に願ったので、彼はこう語りました。「かつて、ミラノに住む、理性を失い、分別を失った者のための医者であり、治療を委ねられた者を一定の期間に治療することを引き受けていた人がいました。彼がおこなっていたやり方というのは次のとおりです。彼は自分の家に庭をもっていたのですが、そこに汚れて、悪臭を放つ沼をしつらえ、その中に、彼の

意に従う狂人たちを、杭に縛りつけて浸していたのです。ある者は膝まで、ある者は腰まで、ある者はさらに深くまで、彼らの病の重さに応じて、彼らが正気を取り戻したと見えるまで、水の中に、断食状態で浸しておきました。こうした者たちの中に、腿まで水に浸かっていたのですが、一五日で正気に戻り、医者に泥沼から出してくれるように願った、ある人物がいました。医者は、庭を出ないという条件で彼の願いを認めました。数日間、彼はその言葉に従っていましたが、それから、扉から道に出ないという条件で、家中を散策することが許されました。この狂人の仲間たちはまだ水の中にいたのですが、彼は医者者の命令を忠実を守っていました。

あるとき、彼が扉のところに立ちながら、沼のことを恐れて、扉を越えて行こうとはせずにいると、拳に鷹を載せ、狩猟のための二匹の犬を連れた若い騎士がやってくるのが見えました。彼が狂気に陥る前に出会ったことも見たことも記憶になかったので、彼にはそれらのものが目新しく、騎士を呼び止めました。若者がやってくると、彼は言いました。『ねえ、少しの間、私の言うことに耳を傾けて、私の質問に答えてくれないだろうか。あなたが乗っているものは何で、何の役に立つのかね』。若者は答えました。『それは馬で、狩猟のために用います』。『あなたの拳の上のものは何という名前です、どんな役に立つのかね』。『それは、小ガモとウズラを獲るために仕込まれた鷹です』。さらに狂人は尋ねました。『あなたが連れてくるものは何で、何の役に立つのかね』。若者は言いました。『それらは、獲物を追い立てる訓練を受けた犬です』。『よく分かりました。ところで、あなたがこのように多くのものを準備して得る獲物ですが、一年間の狩りでいったいどれほどの収益があがるのでしょうか』。若者は答えました。『正確には分か

りませんが、六ドゥカートを超えることはないでしょう』。『それでは、犬と鷹と馬にはどれほど出費されているのですか』。『五〇ドゥカートです』。そこで彼は、この若い騎士の狂気ぶりに驚いて言いました。『さあ、早く、医者が家に戻る前に、ここから遠ざかりなさい。もしあなたをここで見つけたら、あなたを生きている者の中で最も分別を失った者として、他の狂人たちとともに、あなたを治療するために水の中に投げ込むでしょう。しかも、他の狂人とはちがって、あなたは首まで水に浸されるでしょう』。私がここで示したかったのは、狩猟への情熱は、金持ちがおこなったり、身体訓練のためでなければ、愚かなことであるということです。

『伊曾保物語』は『笑話集』第二番で語られている内容はほぼ踏襲しながら、「えしつと(エジプト)の國のさぶらひ」の間で流行していた狩猟の趣味を戒める教訓話として伝えている。

「下廿九」出家とゑのこの事

ある人、ゑのこ一疋なつけ育て、是を愛しけるが、年比ありて、なにとかしたりけん、かのえのこ俄に死する事ありけり。主じ、これを嘆き悲しみて、心に思ふやう、「かゝるいとけなきえのこの死骸は、山野に捨てんよりは、とてももの事に寺のかたはらにうづまばや」と思ひて、日暮に臨んで、人に忍びて、是を取りつゝ堂のほとりにうづみける。

やゝあつて、かの寺の僧これを傳へ聞きて、「こは何物のしわざぞや。かゝる狼藉、前代未聞ためしなし」といひければ、かの主じをよびて、すでにあや敷いましめられ侍りける。主じ、さらに返答

におよばず、赤面してゐたりしが、遁るべきかたなくて、此出家の重欲心をさとして申けるは、「御邊の仰せらるる所、もつとも道理至極なり。然ども、御存知なきにや侍らん。此えのこの臨終、なも有難くいみじき心ざしあり。それをいかにと申に、後世を弔はれんそのために、持ちたる百貫の料足を、貴僧に奉るべしといひおき侍る」とありければ、僧これを聞ひて、思ひの外に勇む氣色にいふやう、「ちてもくかゝるありがたき心ざしはたゞ事にあらず。我をろかなる者の身として、ゆめく是を知らずといましめ侍るなり。御邊は歎き給ふ事なかれ。これほどの心ざしを持ちたらんは、たとひ畜類なりといふとも、必極樂へ生れん事、いさゝかも疑ひ玉ふ事あらじ。われもろともにかの跡を懇に弔ふべし」とて、此の心の心ざしを、奇特なりとて貴まれける。

そのごとく、欲に耽る物は、かの出家にことならず。人あつて引物をさすれば、實に目をくらして、理を非に枉ぐる事は多し。かるが故に、「欲深ければ、戒を破り、罪を作り、身をほろぼす物也」とぞ見えけり。これと思へ。

この物語は、シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」第二六三番「司祭と彼の犬と司教」(De sacerdote, eius cane et episcopo)に対応し、『笑話集』第三六番「子犬を埋葬した司祭」(De sacerdote qui caniculum sepelivit)に拠る。

Erat sacerdos rusticanus in Tuscia admodum opulentus. Hic caniculum sibi carum, cum mortuus esset, sepelivit in coemeterio. Sensit hoc Episcopus, et, in ejus pecuniam animum intendens,

sacerdotem veluti maximi criminis reum ad se puniendum vocat. Sacerdos, qui animum Episcopi satius noverat, quinquaginta aureos secum deferens, ad Episcopum devenit. Qui sepulcrum canis graviter accusans, jussit ad carceres sacerdotem duci. Hic vir sagax: 'O Pater,' inquit, 'si nosceres qua prudentia caniculus fuit, non mirareris si sepulcrum inter homines meruit; fuit enim plus quam ingenio humano, tum in vita, tum praeicipue in morte. 'Quidnam hoc est?' ait Episcopus. 'Testamentum,' inquit sacerdos, 'in fine vitae condens, sciensque egestatem tuam, tibi quinquaginta aureos ex testamento reliquit, quos mecum tuli.' Tum Episcopus et testamentum et sepulcrum comprobans, accepta pecunia, sacerdotem absolvit. (8)

(かつて、トスカナの田舎に、裕福な司祭がいました。彼がかわいがつていた子犬が死んだので、彼は子犬を墓地に埋葬しました。このことが司教の耳に入り、司教はこの司祭の富裕さを羨んでいましたので、重大な罪を犯した者として彼を引きよめました。司教の心を知っていた彼は、五〇ドゥーカをもつて司教のところへ赴きました。司教は彼を目の前にして、犬を墓に入れたことを厳しく責め立てて、牢獄に送ろうとしました。そこで賢い司祭は言いました。「わが師よ、もしあなたが、あの犬が多く知恵を持っていたことを知ったならば、人間と一緒に埋葬されても驚くことはないでしょう。というのも、あの犬は生きている間も、死んだ後も、人間に劣らぬ才知を示したからです」。「それはどういふことか」と司教は尋ねました。司祭は答えました。「あの犬は、臨終にあたって、遺言を認めました。そして、あなた

の貧しさを知っていたので、あなたに五〇ドゥカートを残しました。私はそれをここに持っています」。そこで司教は、遺言と埋葬については認し、貨幣を受け取り、そして司祭を立ち去らせました。」

『笑話集』の筋を忠実に受け継いでいるが、ポツジョでは司教の言葉はほとんど記されていないのに対して、『伊曾保物語』では、「寺の僧」が「百貫の料足」を目の前にして、「多の子」（おそらくは子犬）の功德を大げさに讃えている。物語としては、原典を凌ぐ出来映えと評することができるだろう。

「下三十」人の心のさだまらぬ事

ある翁、市に出て馬を賣らんと思ひ、親子つれてぞ出たりける。馬をさきに立てて、親子跡に苦しげに歩むほどに、道行人これを見て、「あなおかしの翁のしわざや。馬を持ては乗らんがため也。馬をさきに立てて、主はあとに歩む事は、餓鬼の目に水の見えぬといふも此事にや」といひて通りければ、翁、げにもと思ひけん、「若き者なれば、くたびれやする」とて、わが子を乗せて、我はあとにぞつきにける。

又人これを見て、「是なる人を見れば、さかん成物は馬に乗りて、翁はかちより行く」と笑ければ、又子ををろして翁乗りぬ。又申けるは、「これなる人を見れば、親子と見えけるが、あとなる子はあるの外くたびれたるありさまなり。かゝるたくましき馬に乗りながら、親子一つに乗りもせで、くたびれけるはおかしきよ」といひければ、げにもとて、わが子を尻馬に乗せけり。

かくて行ほどに、馬やうやくくたびれければ、又人の申けるは、

「是なる馬を見れば、ふたり乗りけるによ（つ）て、この外くたびれたり。乗りて行かんよりは、四つ足を一つに結び集め、二人して荷ふてこそよかんめれ」といひければ、げにもとて、親子して荷ふ。又人の申けるは、「重き馬を荷はんよりは、皮を剥るで軽々と持つて賣れかし」といへば、げにもとて、皮を剥がせて、肩にかけて行程に、道すがら蠅共に取り付めて目口もあかず、市の人々は笑ひければ、翁腹立て、皮を捨ててぞ歸りける。

其ごとく、一度かなたこなたと移る者は、翁がしわざにことならず。心輕き者は、つねにしづかなる事なしと見えたり。輕々しく人のことを信じて、みだりに移る事なかれ。但、よき道には、いくたびも移りてあやまりなし。事ごとによればとて、胡亂に見ゆる事なかれ。たしかに慎め。

この、自らの定見がなく、他人の意見に従うばかりに、結局、驢馬を失ってしまった親子の語は、上田敏も述べているように、ラ・フォンテーヌの『寓話』第三卷一話「粉ひきとその息子と驢馬」にも同様の趣旨の語が見いだされるが⁽³⁰⁾、実は、シュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」には採録されていないのである。他方、上田敏の指摘どおり、この語はポツジョの『笑話集』に収められている。すなわち、第一〇〇話「驢馬を背負ったある老人についての笑い話」(Facetissimum de sene quodam qui portavit asinum super se) ㄱㄹㄴᄆ。

Dicebatur inter Secretarios Pontificis, eos, qui ad vulgi opinionem viverent, miserima premi servitute, cum nequaquam possibile esset, cum diversa sentirent, placere omnibus, diversis

diversa

Senem ait fuisse, qui cum adolescentulo filio, praecedente absque onere asello quem venditurus erat, ad mercatum proficiscebatur. Praetereuntibus viam quidam in agris operas facientes senem culparunt, quod asellum nihil ferentem neque pater, neque filius ascendisset, sed vacuum onere sineret, cum alter senectute, alter aetate tenera vehiculo egeret. Tum senex adolescentem asino imposuit, ipse pedibus iter faciens. Hoc alii conspicientes increparunt stultitiam senis quod, adolescente qui validior esset super asinum posito, ipse aetate confectus pedes asellum sequeretur. Immutato consilio atque adolescente deposito, ipse asinum ascendit. Paulum vero progressus, audivit alios se culpantes, quod parvulum filium, nulla ratione aetatis habita, tanquam servum post se traheret, ipse asello, qui pater erat, insidens. His verbis permotus, filium asello secum superimposuit. Hoc pacto iter sequens, interrogatus inde ab aliis, an suus esset asellus, cum annisset, castigatus est verbis, quod ejus tanquam alieni nullam curam haberet, minime apti ad tantum onus, cum satis unus ad ferendum esse debuisset. Hic homo perturbatus tot variis sententiis, cum neque vacuo asello, neque ambobus, neque altero superimpositis absque calumnia progredi posset, tandem asellum pedibus junctis ligavit, atque baculo suspensum, suo filiique collo superpositum, ad mercatum deferre coepit. Omnibus propter novitatem spectaculi ad risum effusus, ac stultitiam amborum, maxime vero patris, increpantibus, indignatus ille, supra ripam

fluminis consistens, ligatum asinum in flumen dejecit, atque ita amisso asino domum rediit. Ita bonus vir, dum omnibus parere cupit, nemini satisfaciens, asellum perdidit. ⁽³¹⁾

(教皇庁の秘書官たちの間で、俗衆の意見に従つて、惨めな隷属状態で生きる人々について論じられていました。というのも、さまざまな意見がさまざまに是認されているのですから、さまざまな意見に耳を傾けて万人に気に入られるのは不可能だからです。そこである人が、この見解に関して、かつてドイツにおいて書かれ、描かれているのを見た寓話について、次のように語りました。

「ある老人が、若い息子とともに、売ろうと思つている驢馬に何もつけずに先を行かせ、市場へと向かつていました。彼らが道を進んでいると、畑で農作業をしていた者たちが、老年の父も、年端の行かない息子も乗り物が必要としているのに、二人とも何も運ばない驢馬に乘らず、驢馬の背中は空のままだ、といつて老人を非難しました。そこで老人は、少年を驢馬に載せて、自分は歩いていきました。すると、別の者たちがこれを見て、元気な少年を驢馬に載せて、老いた自分が疲れた足で驢馬のあとをついて行く、と言つて老人の愚かさを批判しました。老人は考えを変えて、少年を降ろして、自分が驢馬に乗りました。ところが、少し進むと、また別の者たちが、小さな息子の年齢のことも考えずに、下僕のように引きずりながら、自分は父親然として驢馬に座つている、と言つて老人を咎めている声が聞こえました。この言葉に動揺して、彼は息子も驢馬に乗せました。こうして道を進んでいると、別の者たちから、この驢馬はあなたのですか、と問われたので肯くと、今度は、この驢馬は一人を運ぶのが順当で、このよう

な重みは耐えられないのに、まるで他人の驢馬のように大切にしない、と難詰されました。この老人は、このように多くの意見を聞いてすっかり混乱してしまいました。驢馬に何も載せなくても、二人で乗っても、一人が乗っても、進むたびに誹謗されるので、ついに老人は、驢馬の脚と一緒に結びつけ、棒にぶら下げて、息子とともに担ぎながら、市場へ向かい始めました。この見慣れぬ光景にみんなは笑い出し、二人の愚かさを、とりわけ父親の愚かさを非難したので、河の淵に立っていた老人は怒りのあまり、驢馬を縛ったままで河に投げ入れ、こうして、驢馬を失ったまま、家に戻りました。こうして、このお人好しは、みんなに気に入られようとしながら、誰にも満足を与えることができずに、しかも驢馬を失ったのです」。

この『笑話集』第一〇〇番は、たしかにシュタインヘーヴェル編「イソップ寓話集」ラテン語・ドイツ語版には収められてはいないが、他方、そのスペイン語版には現われている。その点は、すでに小堀桂一郎氏が指摘していた。

この話もシュタインヘーヴェル集のボツジョ笑話集の部分には出ていないのだが、『伊曾保』の底本となった第何版かの刊本に至って取入れられたものであろう。例えば一四八九年刊のスペイン語訳にこれが採られていることが確認されているので、この採択が後のラテン語版にふり返って反映したこともあり得よう⁽²³⁾。

一四八九年刊行のスペイン語版の内容は、ほとんどラテン語・ドイツ語版を踏襲しているが、『笑話集』については、数話を削除し、代わ

りに数話を付け加えており、その中にこの話が含まれている。管見の限りでは、その後の一四九六年版(ブルゴス刊)、また一五二二年版(セヴィリヤ刊)にも、『笑話集』から採られた話の数に多少の相違はあるが、第一〇〇番は同一のテキストで収められている。遠藤潤一氏は、一四八九年刊行のスペイン語版との異同を詳しく検討して、この「注目すべき対応話」の存在から、および、その他のいくつかの事由から、『伊曾保物語』(正確には、氏が「古活字本祖本」と呼ぶ、失われた底本)へのスペイン語版への影響について論じた⁽²³⁾。そして、氏の推論がおおむね的を射ていると筆者に思われるのは、たんに「注目すべき対応話」の存在だけではなく、その話の内容に関して、ボツジョの原文には存在しない付加部分がスペイン語版に見いだされ、その部分が『伊曾保物語』に反映していると思えることができるからである。そして、この点こそが小論で指摘したかったことである。

スペイン語版に採録された「驢馬を売りに行く父と息子」(Del padre et fojo que yuan avender el asno) は、原典のテキストの数倍に翻案された長文であるので、以下、原典には見いだされない、すなわち、驢馬の皮を剥ぐ箇所について引用する。

... el padre entendiendo todo esto: muido de grand yra: tomando el baston en que lo leuauan acuestas, da vn grand golpe al asno en la cabeza: de manera que lo echo muerto en tierra. et assi lo comenco dessolar: diziendo. o quantas injurias avemos padeschido oy por este asno. Agora creo que avran fin nuestras deshonrras et injurias acabando de dessollar: el tomo su cuero et lo echo en enel ombro para levar ala cibdad si quiera para ayuda

de las expensas et gastos. et entrando en la cibdad fue se para el mercado: donde se puso a vender el cuero. Los rapazes viendo como estava aquel viejo con el cuero del asno ensangrendato et mojado acuestas: segund su mala crianca et costumbre que han de siempre fazer mas mal que bien. Començaron de trabar dela piel vnos por vna parte et otros por otra. Trayendo la por el lodo. et al viejo ensuziando et enlodando abiltadamente en su cara: de tal manera que parecia espantajo. e assi escapo este buen ombre mediuerto. et con dapño de su fazienda: pro que queria complazer a todos...

(34)

(……父はこのすべてを聞いて、大きな怒りに駆られ、驢馬を支えていた棒を手を取って、驢馬の頭を打ち据えました。こうして、驢馬は死んで、地面に倒れました。そして、彼は驢馬の皮を剥ぎはじめ、言いました。「これまで、この驢馬のために、われわれは多くの罵詈雑言を浴びてきたが、今や、皮を剥ぎ終えれば、われわれの不名誉も中傷も終わりを迎えるだろう」。彼は皮を取り上げて、いくらかでも利益を得ようと望んで、町へ運ぶためにそれを担ぎました。そして、町の中に入ると、市場に向かい、そこで、皮を売るため座りこみました。この老人が、驢馬の血まみれで濡れた皮をもっているのを見た子どもたちは、善よりも悪を為すのを常とする悪い癖と習癖にしたがって、ある者どもは皮の一部を、他のある者どもは別の一部を掴み、泥の中を引きずり始めました。そして、老人の顔はすっかり泥で汚されてしまい、まるで案山子のようにになりました。こうして、このお人好しの男は、誰にでも好かれようとしておこなったことの報いを受けて、命か

らから逃げだしました。……)

『伊曾保物語』では、剥がした驢馬の皮を担いで歩いていた老人が、蠅にたかられて目も口も開けることができず、その姿を町の人々に笑われたために怒ってそれを捨てる。他方、スペイン語版「イソップ寓話集」では、町の市場で驢馬の皮を売ろうとしていたところ、悪童たちに悪戯をされて、結局、それを放り出したままで逃げ帰る。老人の結末は異なっているが、驢馬の皮を剥いで、市場へ運ぼうとした点においては一致しており、これは『笑話集』には見いだされない逸話である。『笑話集』では、老人が驢馬を河の中に投げ込んで家に戻ることでは話が終わっていた。驢馬の皮を剥ぐという逸話の付加は、おそらく偶然の一致とは言えないであろう。小堀氏の述べるように、スペイン語版における『笑話集』第一〇〇番の採取が後のラテン語版に反映した可能性はあるとしても、しかしその場合にも、『笑話集』の原文はラテン語版であり、それが広範囲に流布していたにも関わらず、あえてスペイン語版からラテン語訳を作成したという蓋然性はきわめて低いであろう。シュタインハーヴェル系とは異なる「イソップ寓話集」において、『笑話集』第一〇〇話が採録されている場合も、ラテン語原文が載せられている⁽³⁵⁾。

当該の問題について一定の結論を見るためには、インキュナブラダけではなく、一六世紀に刊行された「イソップ寓話集」諸版の網羅的な探索が要求されるわけであるが、『伊曾保物語』(あるいは、その底本)のテキストは、もともとハイブリッドな性格をもっていたという推測も成り立つ余地があるのではないだろうか⁽³⁶⁾。

註

略記号

C = Copinger, W. A. *Supplement to Hain's Repertorium bibliographicum*, Part II. 2 vols. & Addenda. London, 1898 & 1902.

CIBN = Bibliothèque Nationale. *Catalogue des incunables*. T. I fasc 1-3 (Xylographes, A-D); T. II (H-Z). Paris, 1981-2006.

Goff = Goff, Frederick R. *Incunabula in American libraries: a third census*. Millwood (N. Y.), 1973. (Reproduced from the annotated copy of the original edition (New York, 1964) maintained by Goff).

H = Hain, Ludwig. *Repertorium bibliographicum in quo libri omnes ab arte typographica inventa usque ad annum MD. typis expressi ordine alphabetico vel simpliciter enumerantur vel adcuratius recensentur*. 2 vols. Stuttgartae, Lutetiae, 1826-38.

ISTC = *Incunabula Short Title Catalogue*, British Library

IGI = *Indice generale degli incunaboli delle biblioteche d'Italia*. Compilato da T. M. Guarnaschelli e E. Valenziani [et al.]. 6 vols. Roma, 1943-81.

BMC = *Catalogue of books printed in the 15th century now in the British Museum* [*British Library*]. 13 parts. London, 't Goy-Houten, 1963-2007.

BSB-Ink = *Bayrische Staatsbibliothek Inkunabelkatalog*. Bd. 1-6. Wiesbaden, 1988-2005.

GW = *Gesamtkatalog der Wiegendrucke*. Stuttgart, etc., 1968 ff. [<http://www.gesamtkatalogderwiegendrucke.de/>]

(1) ポツジョ・ブラッチョリーニについての邦語文献はきわめて少ない。フィ

ンツェの書籍商ヴェスパジアーノ・ダ・ビスティッチ (Vespasiano da Bisticci, 1421-98) が同時代の人々を活写した『列伝』(*Le vite*) の、ポツジョの項には邦訳がある(岩倉具忠・岩倉翔子・天野恵訳『ルネサンスを彩った人びと』臨川書店、二〇〇〇年、一三三―一三五頁)。最近、『食欲論』が石坂尚武氏によって邦訳された(池上俊一監修『原典 イタリア人文主義』名古屋大学出版会、二〇一〇年、二二五―二六九頁)。そのほか、参考になる文献には以下がある。エウジェニオ・ガレン『イタリアのヒューマニズム』清水純一訳、創文社、一九六〇年。石坂尚武『ルネサンス・ヒューマニズムの研究——「市民的人文主義」の歴史理論への疑問と考察』一九九四年、晃洋書房。

(2) 『笑話集』については、仏語訳からの抄訳が存在する。『風流道化譚』ポツジョ著、大塚幸男訳、鹿鳴社、一九五一年。また、内容に関する紹介は以下に見られぬ。米山善晟『ポツジョ・ブラッチョリーニの『冗談集』(Faezie)の輪郭および各作品の要約』、大阪大学外国語大学口承文芸研究会『世界口承文学研究』第五号(一九八四年)、三九九―四四五ページ。同論文は以下に採録されている。米山善晟・鳥居正雄『イタリア・ノヴェッラの森』佐井寺三角社、一九九三年、三〇四―三〇五ページ。

(3) Poggius Florentinus, *Facetiae*, [Roma: Christophorus Valdarfer, ca. 1470], HC 13174; IGI 7931; BMC V 184; GW M34598; ISTC ip00854300. *Facetiae*, [Georgius Lauer, ca. 1470], H 13179; CIBN P-518; BMC XII:3; GW M3458310; ISTC ip00854600. *Facetiae*, [Roma: Georgius Lauer, ca. 1470], Goff P855; C 4785; IGI 7980; ISTC ip00855000; GW M34582.

(4) ISTC ip00855500; ip00855700; ip0085600; ip00856400; ip00856500; ip00856700; ip00857000; ip00858000; ip00859000; ip00860000; ip00860200; ip00861000; ip00861600; ip00862000; ip00863000;

- ip00861700; ip00864300; ip00864500; ip00865000; ip00865400;
ip00865800; ip00865850; ip00865900; ip00867000; ip00868000;
ip00869000; ip00869500; ip00871000; ip00872000; ip00870000.
- (5) ISTC ip00872400; ip00872450; ip00872500.
- (6) Aesopus, *Fabulae* (tr. Laurentinus Valla); Francesco Petrarca, *De salibus virorum illustrium ac facetiis*; Poggius Florentinus, *Facetiae*, [Utrecht (?): Drucker des Speculum, ca. 1472], C 107; ISTC ia00104200; BMC IX 3; GW 315. Aesopus, *Fabulae* (tr. Laurentinus Valla); Francesco Petrarca, *De salibus virorum illustrium ac facetiis*; Poggius Florentinus, *Facetiae*, Paris: [Louis Simonet und Genossen (Au Soufflet Vert), ca. 1475], Goff P857; HC 13185; CIBN P-520; IGI 65 (II, III); BMC VIII 16; GW M34576; ISTC ip0085700.
- (7) [London, Privately Printed], 1888, pp. 12-10. Cf. Kenneth. B. Gardner, *Descriptive Catalogue of Japanese Books in the British Library Printed before 1700*, London: The British Library/ Japan: Tenri Central Library, 1993, no. 370, pp. 411-412.
- (8) 標準的な校訂版は、新村出・柊源一校註『吉利支丹文学集』下「日本古典全書」、朝日新聞社、一九六〇年、に収められた『インボのハブラス』であり、同書は、平凡社の「東洋文庫」中の『吉利支丹文学集』2、二〇〇八年と二〇一〇年とで二回復刊されている。
- (9) 標準的な校訂版は、『假名草子集』「日本古典文学体系」九〇、岩波書店、一九六一年に収められた、森田武校注『伊曾保物語』である。刊本の種類については、以下の影印本の解説（中川芳雄執筆）も参照のようである。『古活字本「伊曾保物語」国会図書館所蔵本影印』一九九四年、勉誠社。
- (10) 本稿ではこの問題に立ち入らない。以下を参照。小堀桂一郎『伊曾保物語』

- 原本考（上）（下）——シュタインハーヴェル本『インソップ集』に就いて——、『文学』第四六巻一〇号（一九七八年一〇月）、一三六—一四八頁・第四六巻一二号（一九七八年一二月）、九一—一二頁。同『インソップ寓話——その伝承と変容』中公新書、一九七八年（講談社学術文庫、二〇〇一年）。遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究』（正編・続編・総説）、風間書房、一九八三・一九八四・一九八七年。
- (11) 「定本 上田敏全集」、第七巻、上田敏全集刊行會編集、教育出版センター、一九七九年、四—五三頁。
- (12) 同上、五頁。
- (13) 同上、四—四一頁。
- (14) Goff A116; HR 330; IGI 82; BSB-Link A-69; GW 351; ISTC ia00116000. 上の版を基にした校訂版が、一八七三年に刊行されている。Heman Österley (ed.), *Seinhöwels Äsop*, Bibliothek des litterarischen Vereins in Stuttgart, Nr. 117, Tübingen: L. F. Fues, 1987.
- (15) シュタインハーヴェル本については以上を参照。Eckhard Bernstein, *Die Literatur des deutschen Frühhumanismus*, Stuttgart: Metzner, 1978, pp. 75-90; Gerd Dicke, "Neue und alte biographische Bezeugungen Heinrich Steinhöwels: Befunde und Kritik," *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur*, 120, no. 2 (1991), pp. 156-184; Nikolaus Henkel, "Heinrich Steinhöwel," in *Deutsche Dichter der frühen Neuzeit (1450-1600): Ihr Leben und Werk*, ed. Stephan Fussell, Berlin: Erich Schmidt, 1993, pp. 51-70.
- (16) *Vitae et fabulae* (tr. Rinnicius), Milano: Antonius Zaratus, 1471, Goff A99; CIBN A-56; BMC VI 712; GW 335; ISTC ia00099000.
- (17) シュタインハーヴェル篇「インソップ寓話集」については以下を参照。小堀桂

- 一郎『インシブ寓話』133-146頁。Robert T. Lenaghan, “Steinhöwel’s ‘Æsopus’ and Early Humanism,” *Monatshefte*, 60 (1968), pp. 1-8; Barbara Komeker, “Die Rezeption der aesopischen Fabel in der deutschen Literatur des Mittelalters und der frühen Neuzeit,” in *Die Rezeption der Antike*, ed. August Buck, Hamburg: Ernst Hauswedell, 1981, pp. 209-224; Irene Hänsch, *Heinrich Steinhöwels Übersetzungskommentare in “De claris mulieribus” und Æsop*, Göttingen: Kummerle, 1981; Pack Carnes, “Heinrich Steinhöwel and the Sixteenth-Century Fable Tradition,” *Humanistica Iovaniensia. Journal of Neo-Latin Studies*, 35 (1986), pp. 1-29; Gerd Dick, *Heinrich Steinhöwels “Æsopus” und seine Fortsetzer: Untersuchungen zu einem Bucherfolg der Frühdruckzeit*, Tübingen: Niemeyer, 1994.) の通りである。後日、詳しく紹介する予定である。
- (18) ISTC ia00112000; ia00113000; ia00114000; ia00115000.
- (19) ISTC ia00119000; ia00120000; ia00120300; ia00120500; ia00120600; ia00121000; ia00121200; ia00121400; ia00121500; ia00121600; ia00121800; ia00122000. Cf. ia00122400 [Low German]; ia00122600 [Low German]; ia00123000 [German (Cologne dialect)].
- (20) GW 368; ISTC ia00118200.
- (21) ISTC ia00118250; ia00118300; ia00118400; ia00118500; ia00118700; ia00118800; ia00118900.
- (22) HC 360; BMC XI 153; GW 376; ISTC ia00117500. 以下のトットン版は、*Æsop’s fables in William Caxton’s original illustrated edition*, edited by Bamber and Christina Gascoigne, London: Hamish Hamilton, 1984. 詳しく註と解説を伴った以下の邦訳が存在する。ウィリアム・キャクストン『インシブ寓話集』、伊藤正義訳、岩波ブックサービスセンター、一九九五年。また、内容の詳しい検討は、遠藤潤一『伊曾保物語の原典的研究』(正編・続編)でなされる。
- (23) ISTC ia00117500; ia0011800; ia00118100.
- (24) HC 361; GW 374; ISTC ia00116900. Cf. ISTC ia00117000. チェロ語版(一四八八年頃)も存在する。ISTC ia00116500.
- (25) ISTC ia00123500; ia00123100; ia00123150; ia00123200. 一四八九年版の「つづ」一四二九年にフランクフルト版が刊行されている(*Fabulas de Æsopo: Reproducção en facsimile de la primera edición de 1489*, Publicalca la Real academia Española, Madrid: Tipografía de archivos, 1929)。⁹ 多くの語版「インシブ寓話集」の「つづ」は以下を参照。⁹ D. Beyerle, “Der spanische Æsop des 15. Jahrhunderts,” *Romanistisches Jahrbuch*, 31 (1980), pp. 312-318.
- (26) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社、一九六一年、三三-三三六・七七-七八・七九、一八九頁。同『西洋文学の移入』春秋社、一九七四年、一一八-一九・一六三・一七七・一九〇頁。
- (27) テキストは上記『日本古典文学体系』版に拠る。
- (28) *Poggii Florentini Opera*, Basilie apud Henricum Petrum, 1538 [Poggius Bracciolini, *Opera Omnia*, ed. Riccardo Fubini, Torino: Bottega d’Erasmio, 1964, Tom. I], pp. 421-422. 『笑話集』の最近の校訂版としては、*Erasmio*, 1983; Poggio Bracciolini, *Facezie*, ed. Marcello Cicuto, Milano: Rizzoli, 1983; Poggio Bracciolini, *Facezie*, ed. Stefano Pittaluga, Milano: Garzanti, 1995.
- (29) ed. cit., p. 451.
- (30) 『寓話』(一) 今野一雄訳、岩波文庫、一九七二年、一五七-一六二頁。た

だし、ラ・フォンテーヌ版では、驢馬は最初に脚を縛って運ばれる。

- (31) ed. cit., p. 447.
- (32) 小堀桂一郎『イソップ寓話』二二二―二二三頁。
- (33) 遠藤潤一『伊曾保物語の原典的研究』（総説、四八一―五三〇頁）。
- (34) 上記のファクシミリ版に拠る。なお、全文が遠藤潤一『伊曾保物語の原典的研究』（総説 四九五―四九八頁に引用されている）。
- (35) e. g. Aesopus / Guilelmus [de Gouda] / Baerland, Adrian van: *Fabularum que hoc libro continentur, interpretes atque authores sunt hi: Guil. Goudanus, H. Barlandus ... et Nic. Gerbellius Phorc.*, Argentoratum, 1523, pp. 233-234.
- (36) 『伊曾保物語』には、シュタイン・ヘーヴェル編「イソップ寓話集」に見いだされない話が、全体で五話含まれており、『笑話集』第一〇〇番以外の寓話についても、典拠とした刊本が明確とはなっていない。